

学校経営研究は二足のわらじ

水本徳明
教育学系助教授

学校経営学という分野

分野名「学校経営学」—自分で書きながら、いかにも堅苦しい名称だと思う。専門は何ですかと聞かれて、「学校経営学」ですと答えるとき、いつも、相手はそこから何をイメージするのだろうかと思不安になる。いっそのこと、一般には用いられない専門用語の分野名であればまだよいのと思うこともある。「学校」という誰もがよく知っていると思っているものと、「経営学」という経済学の一分野か、社会学の一分野か、はたまた社長学みたいなものかわかりにくい学問の名前をくっつけて、いったい何が出てくるのだろうか。そんな疑問が当然にもわいてくるだろうと思われるからである。

しかし、私はこの名称が好きだし、この名称でなくてはならないものがあると思っている。たとえば「学校組織論」ではなく「学校経営学」であることは私たちの研究に負わされた実践性を表してい

ると思っているし、そこに研究の面白さもあると感じている。学校で発生する様々な問題について組織論的観点から分析するだけでなく、問題への取り組みを支援する知見を生み出すこと。また、研究活動そのものが学校での問題解決と実践的に関わること。それが「学校経営学」の特色であると考えている。もちろんその一方で基礎的・理論的な研究も不可欠であるが、たとえば調査などで学校を訪問するとき、自らの拠って立つ理論が学校の現実の中に身を置いたときの実感とずれてはいないか、あるいは学校に関わっている当事者の実感とあまりにかけ離れてはいないか、それが一番気がかりな点である。

研究室のスタッフと出身者

教育学系の学校経営学研究室には小島弘道教授、浜田博文講師、佐藤博志講師、そして私の4名のスタッフがいる。

小島教授は現在、日本教育経営学会の会長である。小島教授は日本の学校経営政策の分析を行いつつ、これからの日本の学校の管理職養成プログラム作成に向けての研究を進めている。浜田講師は学校経営の日米比較研究を継続するとともに「学級崩壊」など日本の学校経営の現実的課題と関わった研究も行っている。また、佐藤講師はオーストラリアの学校経営政策に関する研究を一貫して進めてきているが、最近では品川区にも足を運んで日本でも取り組みが始まった学校選択制度に関する実証的な研究も行っている。

研究室の出身者は全国の大学・研究機関で多く活躍しているが、一人だけ、最近文部省の委嘱研究で「学級崩壊」に関する調査報告書をまとめた小松郁夫氏（国立教育研究所教育経営研究部長）を紹介しておこう。氏が社会的に問題となっている「学級崩壊」に関するプロジェクトを率いて、全国の事例を丹念に分析し、問題を引き起こす要因を明らかにするとともに、その解決のための取り組みの指針を示したことはよく知られている。

しかし、私たちの間では小松氏はイギリスのとくにサッチャー首相による大規模な教育改革以後の、教育行政・学校経営に関する研究者として知られてきた。

教育への「市場原理」の導入とその学校教育への影響について、イギリスという「先進国」をフィールドとした実証的研究を行ってきたし、現在でもこの分野での第一人者であることに変わりはない。

二足のわらじ

このように、私たちの研究は二足のわらじ的な性格を帯びる。それは最初に書いたような「学校経営学」というものの実践的性格によるものだと思う。もちろん個人的には、意図的に二足のわらじ状態に自らを追い込むこともあるし、ふと気づくとそうなっていたということもある。しかし、研究室としてはかなり自覚的かつ継続的に二足のわらじ状態を追求してきたといってよいと思う。

数年前、研究室の共同研究として県内のある高校の学校改善について事例調査をしたことがある。とくにそのための制度改変を伴うわけでもなく、教育委員会などから強力な援助を受けたわけでもない、いわば普通の高校が行った学校改善のプロセスとそれに関わる要因を描き出そうとした研究であった。日本の現代の高等学校を改善する、その方途を探ろうというのが根底にあった研究関心であった。

このとき院生の中心になってこの研究をリードしたのは武井敦史氏 現兵庫教

育大学講師)であったが、彼はインドのある農村における小学校のエスノグラフィ調査を継続し、学校という近代的な装置の中でいかに非近代的なものが維持され場合によっては発展させられるのかという困難なテーマと取り組み、それによって博士の学位を取得した。

こうした二足のわらじ状態は、各個人の内部に二元的な研究のパースペクティブをどう処理するかという課題をもたらすことになる。ある者は片方のわらじこそが本物だと割り切り、またある者はそれぞれのわらじを履いている人格は別個のものだと考える。そして場合によっては、二足のわらじでしっかり歩ける地平自体を自ら作り出そうとする。

いずれにしても、こうした研究上の課題は厄介なものである。しかし、その厄介さこそが「学校経営学」の面白さでもあるし、エネルギーでもある。そして、そのような面白さやエネルギーを伝えていくことがとくに大学院での指導の方針であり、特色であるといってよいと思う。

私の二足のわらじ

最後に私自身の二足のわらじについて触れておきたい。私が履いている一足のわらじには、社会システム論としての学校組織論と書いてある。ルーマンの組織

システム論・教育システム論に依拠しながら、学校組織に関するシステム論的な理論構築を試みてきた。

もう一足のわらじには小学校教員の意思決定研究と書いてある。具体的には、算数の授業づくりと学校の組織的要因との関連の実証的説明を、信州大学教育学部の吉田稔教授(数学教育)の協力を得ながら進めている。

私自身はこの二足のわらじは共通の地平にしっかりと接していると思っている。これまで学校組織についてはルーソ・カップリングであることが言われてきたが、必ずしも授業や教育という学校における活動に即してその内実が明らかにされてきたわけではない。そこで、これまで学校経営研究や学校組織研究では明らかにされてこなかった、授業という相互作用システムと学校という組織システムのカップリングの問題を解こうとしているのである。

もっとも、最近では学級編制や教職員配置、「総合的な学習の時間」など私の関心は拡散する傾向があり、面白い取り組みをしている学校の話など聞くと時間を作って出かけていくようにしている。わらじが三足、四足と増えて足がもつれねばと思う。

(みずもとのりあき 学校経営学)